

特別講演

授業をいかにデザインするか

名古屋大学高等教育研究センター 教授
池田 輝 政

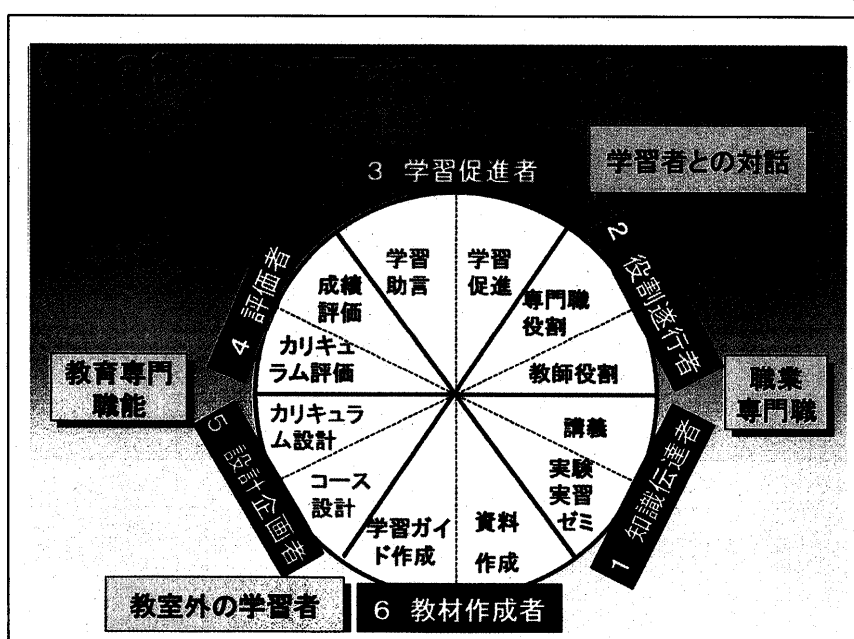
名古屋大学の池田でございます。おはようございます。

私は3日前にちょうどイギリスの調査から帰ってきて、まだ時差調整の境界線上にいますので、少し頭がふわふわとしています。途中何かあやふやなことをしゃべってはいけないという思いにかられていますので、ちょっと緊張しております。きょうは難しいことはしゃべらないようにいたします。今日のテーマを発表させていただきますので、よろしくおつき合ください。タイトルは「授業をいかにデザインするか」ということなんですが、「成長するティップス先生からのメッセージ」という内容で話をいたします。

きょうのポイントは「ラーニング・アバウト」から

「ラーニング・トゥー・ビー」の共有です。学習というのは、ある事柄について頭で理解する面と、それから経験や実習を通して何かを身につける面があります。今まで我々は学生を相手にして大事な知識をとにかく学んでもらうという思いが強かったですね。だけど現在ではそうした教育観や学習観だけではどうも通じない。これからの教育では、ラーニング・トゥー・ビー、つまり経験を通して何かを身につけてもらうという学習の考え方や方法が求められているのではないかと。それを私自身が少しわかりかけてきた。そのことを具体例を交えながら少し話をさせていただきます。

まず教師の役割についてパワーポイントで図を作りましたのでご覧ください。



出所：R.M. Harden & Joy Crosby (2000), “ AMEE Guide No.20:
The good teacher is more than a lecturer the twelve
roles of the teacher” *Medical Teacher* Vol.22, No.4
から作成

これは「「よい教師は講義するだけでは済まされない」という標題のスライドです。医学の専門分野を前提に大学教師の6つの教育役割を図示したものです。

「メディカル・ティーチャー」の論文からもってきたものですが、ここでは医学という分野にとらわれない形に原図を少し修正しました。これをちょっと説明させていただきます。

これを見ると、大学教師の6つの役割は、1. 知識伝達者、2. 役割遂行者、3. 学習促進者、4. 評価者、5. 設計企画者、6. 教材作成者からなります。細かくは12の役割になっています。

「1. 知識伝達者」のなかには、講義スタイルと、実験・実習スタイルがありますが、講義スタイルはラーニング・アバウト、実験・実習スタイルはラーニング・トゥー・ビーの学習観に対応していると考ええると分かりやすい。でも、「3. 学習促進者」もラーニング・トゥー・ビーの学習観に関係しているでしょう。「2. 役割遂行者」とは、職務遂行者および研究専門職としての能力に関係しています。

それから、「3. 学習促進者」は、例えば、学生が4年間のうちに卒論に向けて自分のテーマを結晶化させていく過程で、いろんな知的刺激やアドバイスを与えてガイドする役割ですね。理科系の先生方、特に工学部の先生方といろいろ話すときに、4年間の卒論のときに、学生にテーマを与えられるケースが多い。そのことで、この8月に名大であるセミナーをやったときに、ある大企業の人事スタッフの方から注意がありました。工学部の学生に面接やって、卒論の話をしようとしたら、これは僕のテーマじゃない、与えられたテーマなんですと、逃げる。そういうケースが多くて、これでは困るという苦言がありました。会場からは工学部の先生方から反論がありましたが。人文社会分野の私自身の方針は、学生が4年間もいて自分自身のテーマが設定できないのは、知識を創造する場としての大学教育にはならないと思っているんです。いずれにしても、この役割も非常に難しいです。

「4. 評価者」では成績評価とカリキュラム評価の能力が大事です。センター長の小林先生がカリキュラム改革を新潟大で考えられています。カリキュラム評価とは、大学や学部が設定したカリキュラム目標と

個々の授業の目標との一貫性を大事にする考え方です。日本の場合、この「評価者」の役割というのは多くの先生方には欠如しているのではと思います。すべての先生がこのカリキュラム評価の能力を持つべきだとは言いません。これは身につけるのに時間がかかりますから。だけど、少なくとも教育組織のなかに2割か3割の先生方は既にこれを持っている必要がある。そうすると、教育改革が学内でうまく回っていく可能性が高くなる。新潟大学、名古屋大学などの大学教育研究センターは、この面での相談や助言のできるプロになることが大事ですね。

「5. 設計企画者」にはカリキュラム設計とコース設計があります。プランニングの役割ですね。なかでもカリキュラム設計がすべての役割の中で一番難しいと言われています。現実的に言えば、すべての先生がこの役割を身につける必要はありません。それこそ比較的少数の先生でいいから、これについての専門的な力量をもっていることが大事です。これに対してコース設計は、すべての先生が身につけるべき必須の職能です。これが今日のテーマですが。FDの最初はこのからアプローチすべきですね。

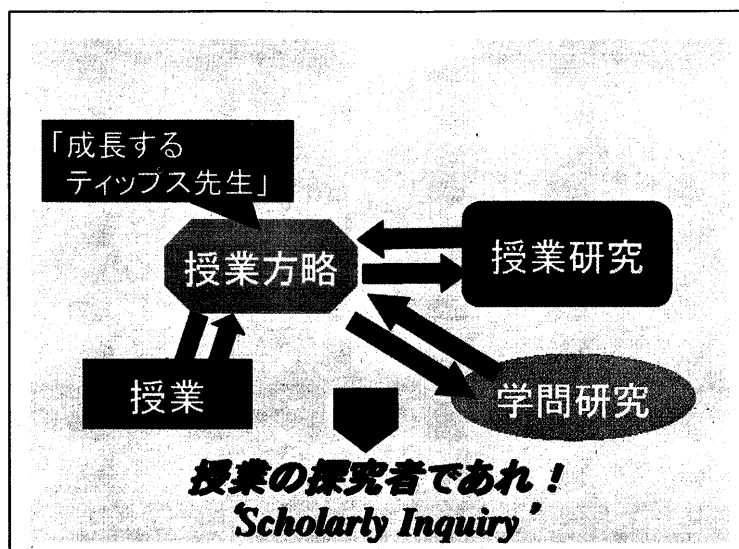
最後に、「6. 教材作成者」の役割です。教材や資料、学習ガイドをシラバスにそって自作できたり、準備する能力です。最近流行語のバーチャル・ユニバーシティは、コンピュータ上の大学教育システムですが、その背景にある学習者観はインデペンデント・ラーナー（自立した学習者）です。こうした教育システムは教室外の学習が主たる場になりますから、いい教材がそのなかに組み込めるかどうかが鍵になります。

とにかく、これだけ複雑な役割行動が教師には求められるということを知るだけでも面白い。授業研修が必要な理由が納得いきます。

「成長するティップス先生」の方法論の話をする前に、下の図式を説明させてください。我々が教育を考えるときにまず頭に浮かぶのは授業実践と学問研究という二つの要素です。それに授業研究という領域が加わって、授業方略の必要性が意識されてきた。しかし、授業研究が盛んに行われても、それが授業方略に反映されるには時間がかかる。なぜなら、授業方略は授業

実践のなかから経験的に作られる側面と、授業研究の知見によってつくられる側面の2面性をもっているからです。我々が開発した「成長するティップス先生」はまず、ティーチングティップスという言葉が表すよ

うに、授業実践の経験のなかから立ち上がってきた授業方略をベースに開発しています。これにはいろいろな授業研究の成果も組み入れられていますが、



授業方略の意味づけをこのように考えて作ったのが上の図式ですが、これが正しい説明かどうかまだ仮説の段階です。少なくとも授業方略を中心にしたこういう図式を考えておくと、全体像が少し見えてきて、我々がどのような授業改善を進めるべきかを議論しやすくなる。図式の一番下に記した「授業の探究者であれ!

(Scholarly Inquiry)」の言葉は、教育に従事する教師は授業方略を研究マインドで探究し、信頼性の高いそして授業のクオリティ向上に役立つものをつくりあげていく、ということを表現したものです。この言葉は、米国のカーネギー財団理事長をされたアーネスト・ボイヤーさんがある著書のなかで述べていました。

さて、ずいぶん遠回りしましたが、私からのメッセージです。「ティップス先生」の授業方略にそって授業を進めた今年の成果を紹介します。本年(平成13年度)の前期の成果です。授業名は「基礎セミナーⅠ・Ⅱ」です。名古屋大学の1年次生に授業を通して大学に適応させるためにカリキュラム設計された科目の一つですね。私が担当する基礎セミナーは1年間4単位の授業です。学生は20人で文系4学部(法経教文)の学生が混じっております。基礎セミナーの狙いは「設定されたテーマについて学生が参考文献、関係資料、

フィールドワーク、調査研究などを行い、その結果をまとめて発表と討議を行う」というものです。

基礎セミナーの授業目標はできるだけ簡潔に述べ、学生のニーズにアピールするように心がけました。最初にプレゼンテーション能力という目標を示し、さらにその下位目標をより具体的に表現しました。そこでは「プレゼンテーションとは、表現することを楽しむ態度だ」という表現を先を書いてあります。学生は必ず自分を表現したいという欲求をもっています。それでいて引っ込み思案です。そんな学生に対しては、「楽しむこと」という目標をまず示したかったわけです。それから、「表現する内容をもつ」を強調し、最後に「表現する技法をもつ」を順に示しました。以上の3点を行動目標にしました。

プレゼンテーションのテーマは学生の生活文脈に合わせて題材を選びました。テーマは「ユニクロはなぜ消費者の心をつかんだのか」にしました。今の若者にはこの題材が適していると思ったからです。テーマ設定では「なぜ?」という問いとその問題解決のプロセスを大事にしました。

授業の方法は、20人を4人ずつに分け5チームで作業を進めることにしました。ここでも名古屋大学の学生は個人での勉強が多く、チームでの勉強はあまり

経験していないという前提に立っています。チームの力やディスカッションをする能力は、大学では価値ある何かを達成するために不可欠でしょう。

プレゼンテーションの方法は、「パワーポイント」というコンピュータのアプリケーションツールを使うことにしました。道具を使いながらある形にそって進めるほうが、指導する側も、学習する側も楽しいし、効果も検証しやすいからです。以下に、4月から7月までの前期授業の成果の一部を「パワーポイント」の画面で示してみます。これは5チームの中で最もできがよかったチームの例です。プレゼン用に作ったスライドは全部で11枚。背景観察、仮説、検証、まとめ、議論、資料の順に並んでいます。

スライド1は背景観察で、テーマの背景にあるユニクロ現象を生産者側と消費者側の二次元の視点でまとめています。

仮説の設定がスライド2です。仮説は、ユニクロ的

ブランドマネージングから発想して、次の検証作業を時間内に進めるために、メディアを利用した鮮やかな広報戦略が奏効した、具体化しています。

検証はサンプルとしてスライド3を示しますが、宣伝費の他店舗比較、ショッピングサイトのランキング、アパレル業者の雑誌掲載数、売上と宣伝費の関係図、を沢山集めたデータのなかから選択しています。インターネットから取ってきたデータに必ず出所を書いておくように指導しています。それは知的マナーだということも言い添えます。それからスライド4と5にまとめと考察、そしてスライド6が資料リストです。

チームによって当然成果に差が出てきますが、どのチームのスライド発表も同じように背景観察、仮説、検証、まとめ、議論、資料の順に並んでいます。これは毎回、私が手渡したシラバスのなかの指示や作業手順を確認してもらいながら、各チームにそれぞれ進めてもらいました。

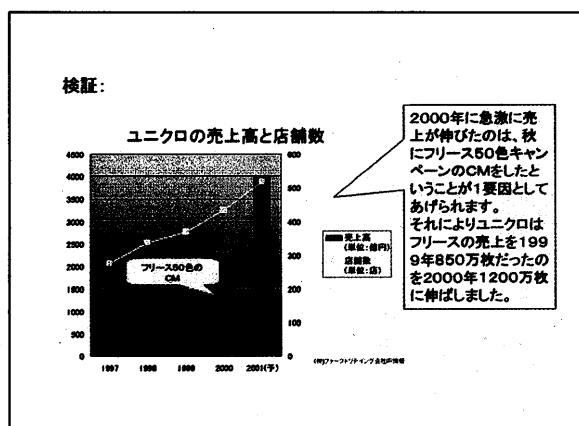
- ユニクロ型ビジネスモデルの確立
⇒自社企画・自社生産・自社販売のスタイルによる低価格高品質の実現。
メディアを活用したブランド意識作り。
- 消費者の低価格志向
⇒不景気による衣料品消費の低迷。
安くても良いものを望む傾向。

スライド1

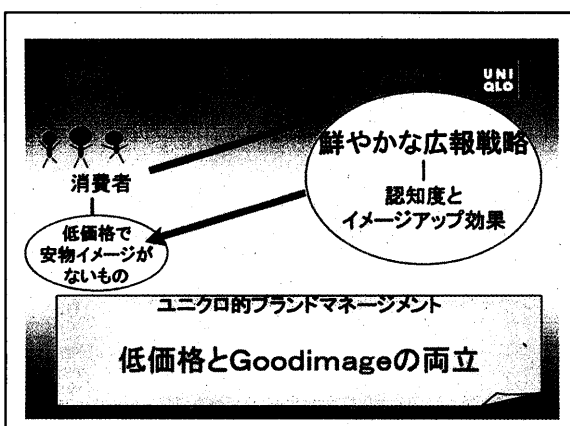
ユニクロ的ブランドマネージング

つまり・・・
メディアを利用した鮮やかな広報戦略

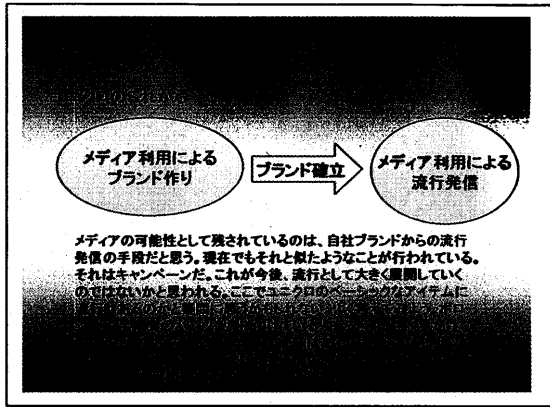
スライド2



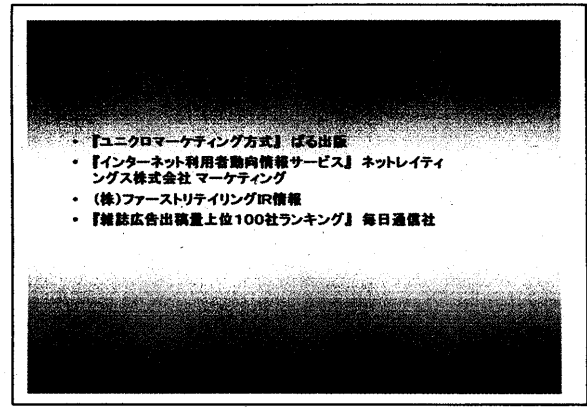
スライド3



スライド4

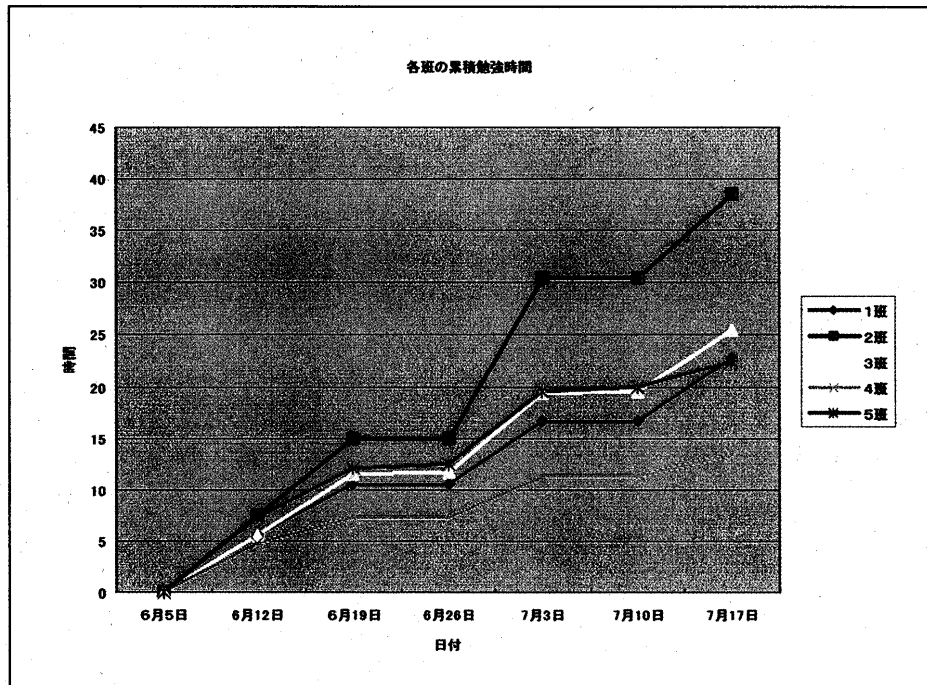


スライド5



スライド6

半期13回の授業でここまでまとめ上げるために使った教室外の学習時間を確認しておきます。



上の図は各班の平均学習時間の累積分布です。授業途中からの数値ですが、最後の授業の7月17日の時点で、もっとも高い2班(緑)の平均時間は40時間。この班は個人差がほとんどない、つまり特定の個人に頼ることがないのが特徴だったので、全員が6月始めから7月中旬までの1ヶ月半に教室外で40時間近く使ったことになります。これは表面に出た成果ですので、隠れた努力は相当なものでした。

通年の授業ですが、前期の成績評価の方法はチーム単位です。後期は個人とチームの二本立ての評価をし

ます。個人は、各自にA4版1枚程度のレポートとそれをパワーポイントで表現した成果をフロッピーで提出させ発表も求めます。

評価の基準として大事なのは、授業の下位目標3つ(表現を楽しむ態度、表現する内容をもつ、表現する技法を身につける)にそって評価することです。目標と評価基準が違うケースが多いので、それは要注意です。態度とか内容は身につけるのに時間がかかりますが、技法はすぐに身につけることができます。機器の操作以外にパワーポイントというプレゼンテーション

ソフトを楽しみながら学習するように配慮しています。

「成長するティップス先生」の授業方略では、授業目標を実現するための手順を明示するシラバスがすべての出発点になります。シラバス上で学習者との対話を心がける。学習者が毎回それを見るようなシラバスを書くことです。そして、教師はシラバスにそって授業を進めることが基本です。これが授業目標をマネジメントするという考え方と方法です。学生もその気になって授業にコミットするようになります。

この教師のマネジメント力を側面からサポートする

ために名大の我々が河合塾と一緒に開発したのが、「ゴーイングシラバス」(動くシラバス)というコンピュータのソフトウェアです。下に示したのが、私の授業の「ゴーイングシラバス」の最初の画面です。これは産学連携の研究開発です。このツールを使って、学生は授業外でコンピュータにアクセスして、コンピュータを通して私や TA (ティーチング・アシスタント) それから学生相互でコミュニケーションするということが可能になりました。これからは情報化のツールを教育環境としてうまく利用することも必要になりますし、授業の方法も柔軟になります。

授業名	2001/04/16
この授業のシラバスです。基本情報、授業概要、授業計画が載っています。	
授業名	2001/05/15
担当教員から学生への連絡です。授業の都合でチェックしてください。	
授業名	2001/05/15
この授業の記録です。授業の進捗に合わせて更新されます。	
授業名	2001/05/22
この授業の電子掲示板です。ルールも守ってご利用ください。	

かなり時間が長くなりましたので、この辺りでやめますが、最後にシラバスについて強調しておきたいと思います。

シラバスとは・・・

1. 学生が履修計画を立てたり、科目選択を行うための情報源
2. 教師と学生が結ぶ公的な「契約書」
3. 授業全体(コース)の設計書

上の図にシラバスの特徴を4点、まとめておきます。第一に、それは学生が履修計画を立てたり、科目選択を行うための情報源だという点です。第二に、それは教師と学生が結ぶ公的な契約書だということです。だから、書いたものは、そのままそれに従って授業を進める。書き方が大事になります。第三に、授業全体の設計書なんです。授業の全体が学生に見えるようにすることです。最後に、学生が教室内外で行う学習の指針になる。ですから、シラバスの中には学生に対するメッセージとして課題を書かなきゃいけない。教師の自分がどうすることを書かなくてもいいわけですね。学習者に何をしてもらいたいかを書かないと有効なシラバスにはならない。もちろん、その背後には、教室外でどのくらいの時間を使って学習すれば、どの

程度の成果ができるか、あるいは目標がどの程度達成されるかの計算が必要になります。

シラバスを有効に使えるようになると、授業の力学が作り出せるようになります。その力学を理解できるようになるには、先生方が自分で実際にこれを経験していくしかないですね。1年目は失敗しても結構です。必ず2年目で飛躍的によくなると思います。3年目はさらによくなります。

結びです。「ラーニング・アバウトつまりシラバスを知る」から、「ラーニング・トゥー・ビー、すなわちシラバスを駆使する授業のデザイナーになる」、という方向に先生方が努力されるように、というのが私からのメッセージです。

以上で終わります。